

本にノックアウトされて

教育学部教授 奥野 忠徳



2年ほど前だったか、所用で仙台に行き、帰りの新幹線で手持ち無沙汰なのもいやだなと思い、ぶらっと駅前の丸善に入った。ふと見ると、The Da Vinci Code という英文の本が山積みになっていた。なにげなく手に取り、パラパラと見たら、簡単そうな英語でなにやら面白そうな内容なので買ってみた。新幹線に乗り込み、さっそく読み出した。内容があまりに面白く、やめられない。その内、弘前に着いてしまったが、帰宅してもやめられず、ずっと読み続け、ほぼ徹夜してしまった。これほど本の世界に引き込まれたのは久しぶりだった。翌日、翌々日も寝食も忘れて一心不乱に読み続けた。500頁にも及ぶ長編小説であるが、あっという間に読破したように思う。完全に著者 Dan Brown にノックアウトされた格好だ。翌年、また最初から、今度はかなり丹念に読んだ。プロットがわかっても同様に引き込まれる。今度は、英語の一字一句にこだわり、細かい考証をしながら読み進んだ。たとえば、Opus Dei という組織が登場するが、ネット検索してみると、本にある通り、それが実在し New York に本部を置いて活動していることがわかった。しかし、事実とは合わない記述も多い。例えば、主人公 Langdon と Sophie がルーブル美術館のトイレから石鹼に GPS 発信機を埋め込んで窓から、下にいたトレーラーに投げ込むというシーンがあるが、実際にはそのような場所にトイレはないようである。あるいは、Langdon と Sophie が Saint-Lazare 駅から北フランスの Lille 行きの特急に乗ったと装う場面があるが、この特急は Saint-Lazare 駅ではなく、Nord 駅から出ているはずである。このような細かいことは置くとして、この小説の真骨頂は、ヨーロッパ文明を支えるキリスト教の根幹を推理小説仕立てにしたことである。小説は、ルーブル美術館でその館長が殺害され、館長が謎の文字を残すという場面から始まる。さまざまな謎を解いていく内に、背後にはとてつもなく大きな力があることが明らかになっていく。その過程で、ダ・ヴィンチ、ニュートン、ローマ帝国のコンスタンチヌス帝、 Templar 騎士団、マグダラのマリアなどがキーパーソンとして登場し、さらに、「最期の晩餐」「岩窟の聖母」などさまざまな絵画や、ルーブル美術館、ウェストミンスター寺院などの建築も登場する。そのスケールは大きく、現在のヨーロッパ文明についていろいろと考えさせられるテーマを含んでいる。上にも述べたように、小説であるからにはすべてが事実というわけではないが、かなり大きなテーマを扱っており、この小説を基に、いろいろと自分で思索を深めていくことができる一冊である。できれば原文の英語で読みたいものである。

(おくの ただのり)